



# 思い、届くことを願って

「これ以上、治療の施しようはありませんって言われたんだ」とAさんは笑って話された。私が「看護実習生が来るのですが、よろしければ2日間、いろいろお話を聞かせていただけませんか」と伺うと「いいよ」と返ってきた。Aさんの妻はすでに亡くなり、2人のお子さんがいた。

「俺は若い時から好きなように生きてきた。全国を放浪して、まあ物書きのようなもんだな。でも家族にはかわいそうなことをしたと思っっている。もう治療できないって言われた時、医者と呼んだんだな。何十年も会っていない娘が来てくれて、本当にうれしかった」としみじみ話された。

持ち物は大きなボストンバッグ一つ。娘さんとお孫さんの写真がバッグからのぞいていた。

数日が過ぎた。Aさんは最期の時を迎えていた。東京にいる娘さんに連絡すると、仕事で忙しかったらしく「この時間ですと間に合わないの、あした行きます」と淡々と話された。私はAさんとの会話が頭をめぐった。

娘さんが何十年ぶりに自分のために来てくれて本当にうれしかったこと、お孫さんの写真をうれしそうに見せてくれたことなどを伝えた。娘さんが電話の向こうで泣いていることが分かった。

私はお二人の思いを受け止める場面に立ち会うことになった。胸が詰まりこみ上げる感情を堪えた。私はとっさに固定電話を自分のPHSに転送した。娘さんに「今、受話器をお父さんの耳に当てます、お話しすることはできないかもしれませんが、あなたの声は

必ず聞こえているはずですよ」と伝え

た。Aさんの耳へ当てた受話器から「お父さん、お父さん、……」と何度も何度も声が漏れていた。私は「うなずいているように見えますよ」と伝えた。苦しそうに呼吸しながらも、穏やかな優しい表情に変わった。そう思えた瞬間だった。Aさんと娘さん、それぞれの思い、届くことを願って……。

〈北海道〉 祐川 尚子 55歳  
すけがわ なおこ